

## 歌舞伎舞踊における歌舞伎の女方との関係性と日本舞踊への発展の一考察

森田ゆい（東京立正短期大学）

### 1. 本論の背景と目的

シンポジウムの「男芸」「女芸」というテーマに沿い、歌舞伎舞踊の歴史を担い手の性別と異装の視点から整理することにより、次の2点について考察することを目的とした。

- ① 歌舞伎舞踊と歌舞伎の女方との関係性
- ② 歌舞伎舞踊から日本舞踊へと発展した要素

### 2. 歌舞伎舞踊と歌舞伎の女方との関係性

女方の誕生までを担い手の性別と異装の視点から整理すると以下のような流れを確認できた。

#### 2-1. 1603年「かぶき踊り」の誕生から「遊女かぶき」「女かぶき（女歌舞伎）」の誕生

出雲お国（女性）が京都の四条河原にて「かぶき踊り」を踊り、一般の庶民を対象に人気を得た。内容は、女性が奇抜な格好で男装をして茶屋で遊女と遊び戯れる様子を歌や踊りで表現したものとされる。この流行後、本物の茶屋がこの流行を取り入れ、遊女たちに男装をさせた「かぶき踊り」の興行を行うようになり「遊女かぶき」が誕生する。内容は、大勢の遊女が男装をして輪になって同じ振りを踊るものであったとされる。続いてこれを真似た女性の芸能者たちの集団が次々と現れ「女かぶき（女歌舞伎）」が誕生する。内容は、音楽面で三味線も取り入れられ、男装した女性たちの集団の踊りであったとされる。

#### 2-2. 1629年 女歌舞伎の禁止令により「若衆歌舞伎」（若衆：成人前の男性）の誕生

内容は、これまでと同様に集団での踊りに加えて、軽業のような動きや道化的な要素も加わり、一人で踊る芸も発達したとされる。ここに男性が女性役を踊る女方が誕生した。

#### 2-3. 1653年 若衆歌舞伎の禁止令により「野郎歌舞伎」の誕生

内容は複数の場面で構成された筋立てのある演劇的なものへと発展する。官能的な踊りが中心だったそれまでの踊りから演劇としての性格を強め、演技技法が求められるようになり、舞台芸術として発展してゆく。ここで女性の役（芝居）を演じる女方が誕生する。

#### 2-4. 17C後半～18C初め 歌舞伎の発展

江戸や京都・大阪などで都市が形成され、町人による文化が発展するのに合わせて、歌舞伎も発展してゆく。江戸では初代市川團十郎による荒事すなわち超人的な力を持った主人公が誕生したのに対して、京都・大阪では柔らかく優美な演技法の和事が誕生する。その中で女方の芸が確立してゆく。

#### 2-5. 18C半ば 女性役による舞踊劇の誕生

舞踊劇は、女方の芸として女方の美しさを見せることを主体として創作された。

歌舞伎舞踊の成立は、図1に示すように女性が男装する集団の踊りであった「かぶき踊り」から男性が女装をして一人で踊る女方の芸（舞踊劇）として発展し、誕生したと言えた。注目すべき点として、担い手の性別に関係なく常に本来の性別を逆転させるような異装の芸として発展して来たことが挙げられる。また歌舞伎舞踊は、男性である女方の美しさを鑑賞させる男芸として誕生したと言えた。

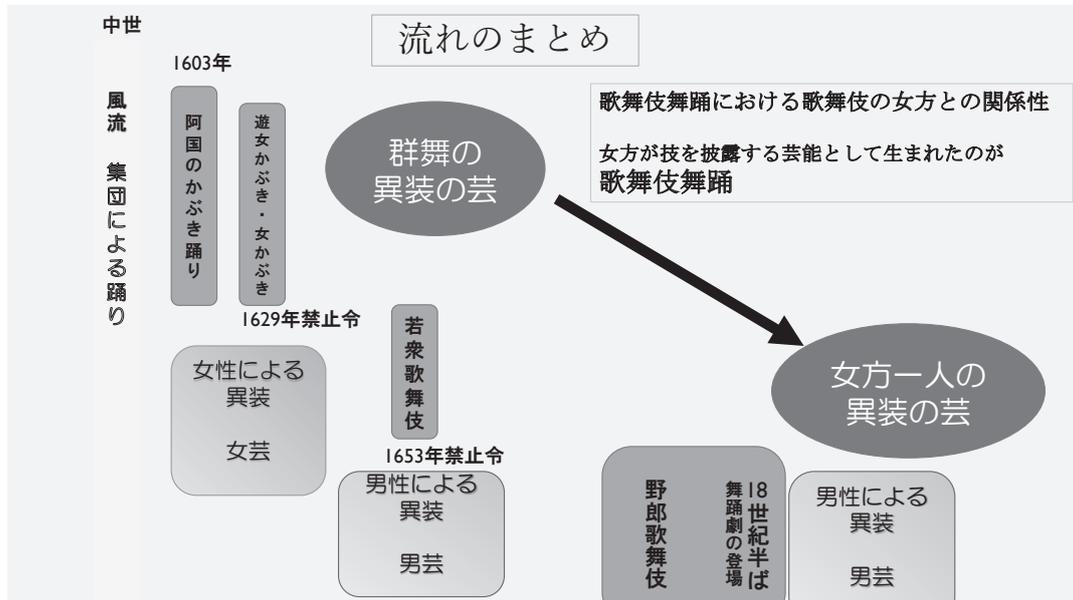


図1 かぶき踊りから歌舞伎舞踊の成立までの流れ —担い手の性別と異装の視点から—

### 3. 日本舞踊への発展

#### 3-1. 重要無形文化財 各個認定（人間国宝）保持者について

【歌舞伎舞踊】のジャンルで2022年までに認定された7名うち男性は5名、女性は2名であった。各舞踊家の概略は以下の通りである。

- 1) 七代目坂東三津五郎 1882年～1961年（明治15年～昭和36年）  
歌舞伎役者。日本舞踊坂東流家元。踊りの神様と呼ばれ、坂東流の普及に努める
- 2) 花柳壽應（二世花柳壽輔）1893年～1970年（明治26年～昭和45年）  
歌舞伎役者の後、花柳流二世家元。新舞踊運動を先導
- 3) 二世藤間勘祖（六世藤間勘十郎）1900年～1990年（明治33年～平成2年）  
歌舞伎役者の後、舞踊家に専念する。尾上菊之助付きの振付師としても活躍
- 4) 藤間藤子 1907年～1998年（明治40年～平成10年）  
藤間流・勘右衛門（歌舞伎役者を兼ねる家元）派の重鎮
- 5) 花柳壽楽 1918年～2007年（大正7年～平成19年）  
花柳壽應、六代目菊五郎主宰の「日本俳優学校」で学ぶ。古典作品だけではなくモダンダンスやバレエも取り入れ、ギリシャ悲劇を題材とした作品や新作を次々発表。「歌舞伎舞踊ではない日本舞踊を創る」ことに尽力
- 6) 十世西川扇藏 1928年～（昭和3年～）  
7歳で十世西川扇藏を襲名。様々な流派（藤間流など）の家元に指導を受ける
- 7) 花柳寿南海 1924年～2018年（大正13年～平成30年）  
花柳壽應に学ぶ。新作舞踊の創作に努める

他に舞踊で各個認定を受けた方に【京舞】1) 井上愛子（四世井上八千代）2) 五世井上八千代、そして【上方舞】1) 山村たか 2) 吉村雄輝 がいる。

【歌舞伎舞踊】での認定者7名の経歴を調べると、自身が歌舞伎役者又は役者であった舞踊家（1, 2, 3）と、歌舞伎役者と歌舞伎舞踊家を兼ねた師匠に学んでいた舞踊家（4, 5, 6, 7）であった。

また、認定保持者となった女性舞踊家をはじめとして歌舞伎舞踊で大成をした女性舞踊家の踊りの特徴について観察したところ、一度男性の骨格に寄せて男性が女性を表現する女方の身体づかいで踊られている傾向が存在することが推察された。

### 3-2. 動きの男らしさ、女らしさ

歌舞伎舞踊家で活躍をした女性舞踊家が一度男性の骨格に寄せて、男性が女性を表現する女方の身体づかいを行なっている可能性について動画を用いて論じた。（発表では、藤間藤子氏（重要無形文化財 各個認定保持者）が孫である藤間蘭黄氏に指導をしている様子の動画を用いて着目点について触れながら見ていただいた）

森下（1989）による動きや身体づかいから定義した男らしさ女らしさの特徴の中から、男らしさにおいては腕が胴体と分節して動く要素、女らしさにおいては全身が随伴して動く要素、予備運動や随伴運動の強調の要素に特に着目をして踊りを論じた。

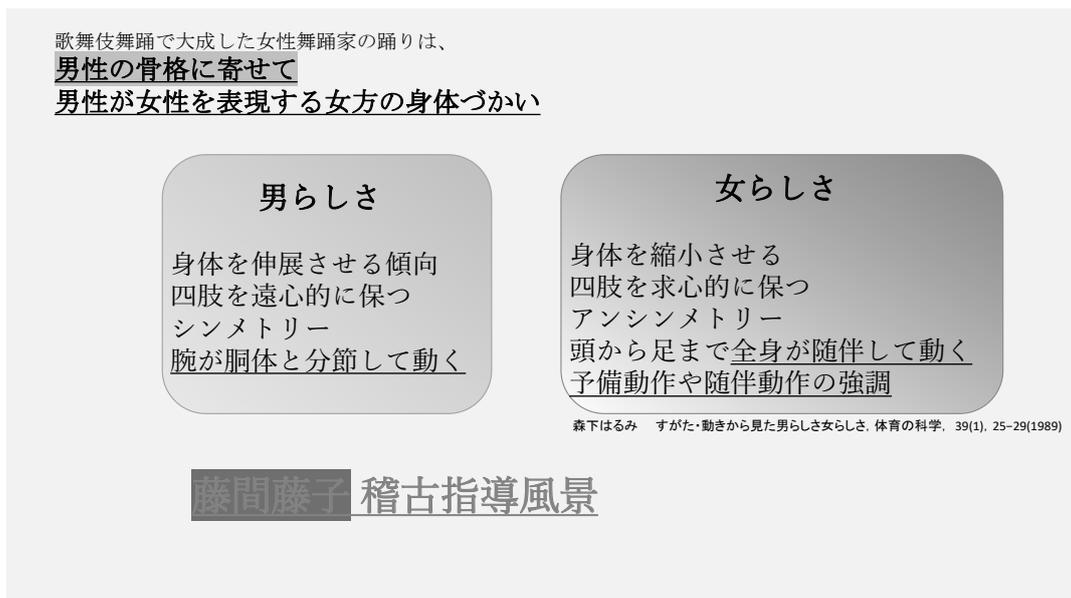


図2 女性の歌舞伎舞踊家にみる身体づかい

### 3-3. 日本舞踊とは

歌舞伎舞踊において重要無形文化財 各個認定の舞踊家たちが“日本舞踊家”を名乗り、日本舞踊協会（1955（昭和30）年設立）に所属していることに注目し、歌舞伎舞踊と日本舞踊の関係性について検討した。

日本舞踊の定義について、日本舞踊協会HP（文責：阿部さとみ）から以下の部分を紹介した。

「日本舞踊は歌舞伎舞踊の技法を基本とした舞踊です。男性だけの歌舞伎から派生し、女性による舞踊が加わったことが大きな特色です。お稽古事としても普及し、日本の伝統文化を支えてきました。（中略）近代に入り日本舞踊は歌舞伎から独立し、プロの日本舞踊家が多数生まれて活躍。」

〔(中略) 大正期には古典舞踊に対する新しい舞踊作品を創造する運動(新舞踊運動)が起こり、女流日本舞踊家が活躍。日本舞踊は歌舞伎という母胎から離れ、稽古事にとどまらない舞台芸術として独立しました。そして昭和期には一般家庭の子女もプロの日本舞踊家を志し、日本舞踊は興隆の時を迎えました。〕

### 3-4. 歌舞伎舞踊から日本舞踊への発展

前述の日本舞踊の説明において“男性だけの歌舞伎から派生し、女性による舞踊が加わった”という記述に着目して、男女の日本舞踊家が同時に女性役を踊る映像の中から回転動作を行う際の身体づかいの違いについて論じた。男性は女方に特有の回転の仕方で行うのに対して、女性は日常動作の延長とも言える行い方であった。(発表では、花柳基氏と藤間恵都子氏が『男女道成寺』を共に踊る動画を見ていただいた)

日本舞踊においては、女性舞踊家が女性役を踊る際、歌舞伎舞踊において用いられていた男性が女性を表現する女方の身体づかいとは異なり、女性の身体づかいのままに踊る傾向がみられた。この女性が女性の身体づかいのままに踊ることが認められる点を日本舞踊への発展した要素と理解できると考察した。

## 4. まとめ

歌舞伎舞踊の歴史を担い手の性別と異装の視点から整理することにより、歌舞伎舞踊と日本舞踊における「男芸」と「女芸」を次のように示すことが出来る可能性を提示した。

- ・ 図1に示すように歌舞伎舞踊の歴史を振り返ると芸の成立に異装の要素が含まれていた。また担い手の性別によって「女芸」から女方の「男芸」へと発展したと言えた。
- ・ 図2と図3に示すように歌舞伎舞踊(女性役の踊りの場合)は男性は女方の身体づかいを用いる「男芸」と言え、女性が踊る場合であっても一旦男性の骨格に寄せて男性が女性役を踊る際の女方の身体づかいを用いて踊られる傾向を持つ「男芸」と定義することが出来ると考えられた。
- ・ 図3に示すように日本舞踊(女性役の踊りの場合)においては、男性は女方の身体づかいを行う「男芸」と言えるが、女性の舞踊家は女性の身体づかいのままに踊る「女芸」として定義することが出来ると考えられた。

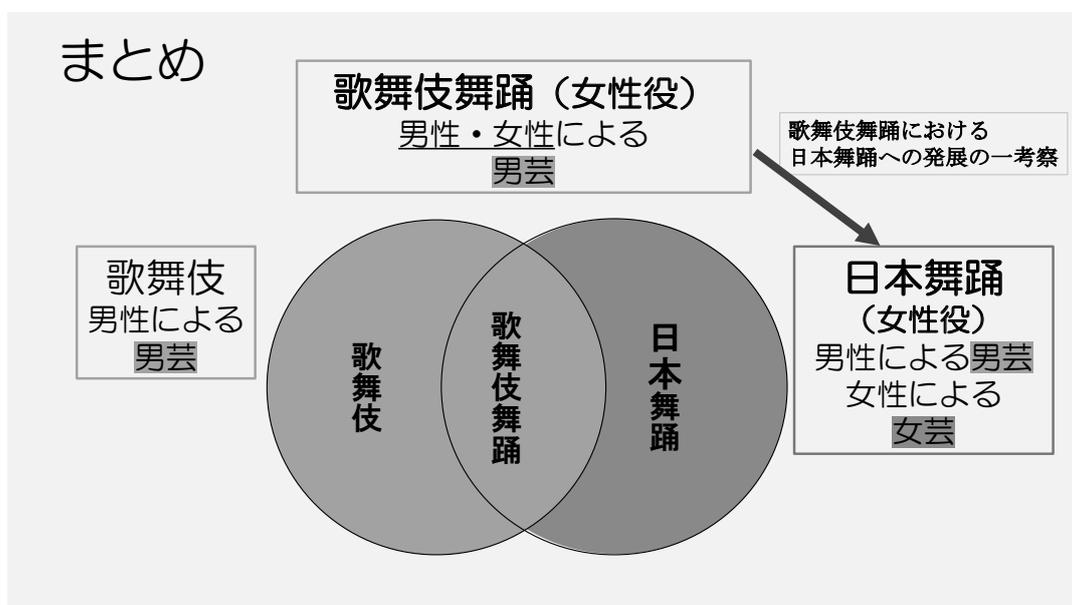


図3 歌舞伎・歌舞伎舞踊・日本舞踊における男芸と女芸の区分

## 引用文献

阿部さとみ, 日本舞踊協会 HP 「日本舞踊とは何か―舞と踊り―」, [https://nihonbuyou.or.jp/pages/about\\_nihonbuyo](https://nihonbuyou.or.jp/pages/about_nihonbuyo),  
(参照 2023,1,12)

森下はるみ, 1989, 「すがた・動きからみた男らしさ、女らしさ」, 『体育の科学』, 39 (1), 25-29.